

## さんごの刻をかぞえて

岩永 貴資

夏の太陽がまぶしい午後でした。五島の富江小学校のグラウンドでは、ソフトボールの練習試合がつづいていました。

「ワンナウト満塁、気合いばいれるよ！」

かんとくの声がひびきます。和真はこしをひくくおとして、バッターをにらみました。にぶいバットの音がきこえました。

「セカンドゴロ！和真、ダブルプレー！」

和真は、あわててボールにつっこみました。けれどボールは、和真のグローブをかすって、うしろに転がっていききました。

「こらあ、なんばしよつとや！」

ふたりホームインです。和真のエラーで、練習試合は、和真たちのチームのサヨナラ負けになりました。

みんなが、かんとくのところひきかえしてきました。だれもが、和真をにらんでいます。とくにピッチャーの伸司は、ふきげんそうでした。

「伸司」と、かんとくがいました。

「気にすんな。おまえとしては、うちとった球じゃった。よう投げたチ思っちよう」

かんとくは、こんどは「和真」とよびました。和真はどきっとしました。

「おまえは、練習がたらん。だいじなときにエラーばしよつたら、本番で使えんぞ」

和真は下をむいて「ハイ」とこたえました。

みんなが、ばらばら帰りだしました。にもつをまとめている和真に、伸司がもんくをいいました。

「おまえのせいぞ。へたかヤツは、ソフトなんか、もう、やめれ」

伸司は、地面をけつとばして帰りました。

和真は去年、四年生の夏、友だちの勝彦のさそいで、チームにはいりました。そのときはやる気まんまんで、まいにち夕方おそくまで練習していました。けれど、なかなかうまくなりません。五年生になってからは、ときどき、練習をさぼるようになってきました。

「和真、ちょっと、練習ばしていこうか」

勝彦が声をかけてきました。勝彦はショートで、セカンドの和真と、いつもいっしょに練習をしています。

「なあ和真。二人でがんばって、かんとくば、びっくりさせてやるうで。おまえじゃつたら、すぐできるようになるって」

「ごめん。きょうは、用のあるけん」

和真はそういって、先に帰りました。本当は、用なんかありません。ただ、練習する気がしませんでした。

家のげんかんで、和真は、ひいおじいちゃんとすれちがいました。

「小島のじいちゃんちにいつてくるけん。母ちゃんの帰ったら、いうとって」

小島には、ひいおじいちゃんの息子、和真のおじいちゃんが住んでいます。

「うち、いま、だれもおらんと？」

和真がたずねましたが、ひいおじいちゃんは、きこえないのか、いつてしまいました。和真は家にはいると、ちらっと、ひいおじいちゃんの仕事部屋をのぞいてみました。

しずかで、少しほこりっぽい感じの部屋です。まどぎわの台の上には、彫りあがったばかりの、桃色の竜がおいてありました。目がぎよろりと大きく、りっぱな角のはえた、いまにも動きだしそうな堂々とした竜です。竜のそばには、仕上げに使う、細い針のような刀が二、三本そろえてありました。

ひいおじいちゃんは、町でも有名なさんご職人です。ことして九十歳になるのに、

病氣ひとつしたことがありません。町の人たちはみんな、ひいおじいちゃんのことを、

「名人」とよんでいます。

和真は小さいころから、ひいおじいちゃんに、いろんな話を聞かされていました。明治十九年、女島という無人島の近くでさんごが発見され、それから富江がさんごの町になったという話。明治三十九年の嵐では、大ぜいの人が遭難して死んだという話。

それがいまでは、女島のさんごはほとんどりつくされ、町にもさんごを彫れる人がだんだんいなくなっているという話。

長崎市からフリーで三時間、さらにバスで四十分。五島列島でいちばん南のこの町をささえてきたのは、さんごでした。そして、ひいおじいちゃんは、そのさんごを彫る「名人」として、町の将来のことをいつも心配していました。

和真は、じぶんの部屋にはいつて、ごろっとあおむけになりました。

天井にむけて、かるくボールを投げます。落ちてきたボールをうけます。ひとりで、五回、十回、十五回と、ぼんやりつづけているうちに、ころっとエラーして、ゆかにボールをおとしてしまいました。

「あー……おもしろなか……」

つぶやいたとたん、部屋の外から、「なんが、おもしろなか」という声がきこえま

した。首をまげてドアの外をみると、お母さんが立っていました。

「ああ母ちゃん。ひいじいちゃん、小島のじいちゃんここに、さっきでていったよ」

「ふうん。ちかごろやっど、会いにいくことになったねエ」

和真のおじいちゃんも、若いころは、さんごを彫っていたそうです。しかし将来が不安だからと、やめて漁師になりました。もうずっと昔の話です。けれどそれくらい、ひいおじいちゃんとは、うまくいかないようでした。

「それで、きょうの練習試合、どげんじゃったと？」

「負けた」

「ああ、それで、おもしろなかと？気にすんなサ。本番で勝てばよか」

「おれ、きょう、エラーしたけん、本番でられんかもしれん」

和真は起きあがりました。

「おれのでらんじゃったら、かわりにでるとは、出口じゃろ。下級生にポジションとらるっとじゃったら、おれ、もうやむつかね……」

「ソフトやめて、どげんすつと？」

和真はなにもこたえませんでした。お母さんが、ためいきをつきました。

「ひいじいちゃんも、五年や十年で名人になったとじゃなかとよ。あんた、たった一年

でやめて、どげんすつと」

「じゃばって、おもしろなかもん」

「なんばいいよつとや。さ、練習練習」

お母さんはそういって、台所にいきました。

和真は、重たい体をもちあげて、ボールをひろいました。そして、うらの空き地でいて、塀にボールを投げはじめました。

はねかえってきたボールをうけて、また投げる。五回、十回とつづけるうちに、また、エラーをしてしまいます。うしろに転がっていったボールを、とりにいく気にもなりません。(みんな、すぐ「ひいじいちゃん、ひいじいちゃん」っていう。そりゃ、ひいじいちゃんは、すごい。でも、ひとつのことを七十年もつづけられる人は、めったにありません。ひいじいちゃんくらべられても、こまる)

和真はそう思いました。そのとき、台所のまどから、お母さんがさげびました。

「そらっ。早く、ボールばとりにいかんね。やめたら、ひいじいちゃんに、はずかしかよー！」

また「ひいじいちゃん」だ。和真はかっとしてさげびかえました。

「ひいじいちゃん、ひいじいちゃんち、うるさかぞー！ おんなじことばっか七十年もつ

づけるち、そりゃバカじゃなかと！」

「あんだ、ひいじいちゃんに、なんちことばいうとね！」

和真は、お母さんがおこって、台所をとびだしてくるんじゃないかと、不安になりました。けれど、お母さんがでてくるようすは、ありませんでした。

和真はボールをひろいにいききました。

「ええい、おもしろなか！」

そうさけんで、塀におかかって、遠くから力いっぱいボールを投げました。ところが、手元がくるって、ボールは大きく右にそれていきました。離れには、ひいおじいちゃんの仕事場があります。

まずい！と思ったときには、ボールはもう仕事場のガラスをやぶって、がしゃーんと、中にとびこんでいました。

まどのそばには、できあがったばかりの竜がおいてあったはずです。

和真は、思わずにげだしました。けれど、どこににげたらいいのか、わかりません。

夕ぐれの町内を、和真は海のほうにいつてみました。港には、漁船がたくさんつないでありました。潮のかおりがただよって、青い波が、小さくゆらいています。船のきしむ音が、かすかにひびいていました。和真はしばらく、湾のむこう、あい色の空につ

つまれた山を、ぼんやりとながめていました。

ひいおじいちゃんは、くる日もくる日も、一生けんめい、あの竜を彫っていました。きつと、これれてるだろう。それをみて、どう思うだろうか。

いくら元氣でも、もう九十歳です。こわれた竜をみて、びっくりして、おこって、悲しんで、ついにたおれてしまいかもしれない。

和真は不安になって、いそいで家におかいました。もう、空はまっ暗でした。

和真は、庭からこっそり、仕事場をのぞいてみました。机におかっているひいおじいちゃん、丸い背中がみえました。まどぎわの台の上に、あの竜はありません。和真は、たなの上や、へやのすみを目でさがしましたが、みあたりません。

どうしたんだろう。ひいおじいちゃんの丸い背中が、なんだか小さくみえました。

「和」

そのとき、ひいおじいちゃんが声をだしました。

「和。そこにおるとじやろ。中にはいつてきなさい」

和真はひやっとしました。ふりむいてもいないのに、ひいおじいちゃんは、和真に気づいていたのです。でも、こうなったら、しかたありません。和真はおそろおそろ、中にはいりました。

ひいおじいちゃんは、机の上から竜をもってきて、和真にわたしました。和真は両手で、竜をそっとかかえました。思ったよりも、ずっしりと重みがありました。桃色にかがやく、まるで生きているような竜です。ただ、頭の角が、かたっばだけ、おれていました。

和真はうつむきました。あんなボールさえ投げなければ、ひいおじいちゃんの大切な竜を、こわすこともなかったのに。

「ひいおじいちゃん……あの……」

和真がつづきをいおうとすると、ひいおじいちゃんが、先に口をひらきました。

「和。この竜は、おまえに、やる」

和真は「ええっ！」とさけびました。

「角の、おれちようじやる。もう売り物にはならんけん、おまえに、やる」

和真は、たったこれぐらい、と思いました。だって、ひいおじいちゃんの彫ったさんごは、しんじられないほど、高値で売れるからです。

「さんごが、この大きさに育つには、どれぐらいかかるか、知っちゃようや」

和真はしばらく考えました。そして「十……いや、二十年？」と、こたえました。

ひいおじいちゃんは、ハハとわらいました。

「どんでもなか。このさんごはな。わしより、ずうっと、ずうっと年上じや」

和真はびっくりしました。九十歳のひいおじいちゃんより、ずっと年上だなんて。木なら、百年も生きれば、そうとうの大木になるはずです。そんなに長くかかって、さんごは、和真がかんたんに持てる大きさにしかならないなんて。

和真は、ひいおじいちゃんをみあげました。

「もっと早く育つさんごは、なかと？」

ひいおじいちゃんは、首をふりました。

「あったとしても、そげんとはつまらん。時間ばかりで、ちっとずつ、ちっとずつ育つたさんごじゃなかと、よかとはでせん。さんごはな……、百年や二百年では、一人前にはなれんと」

和真は、あとのことばがでませんでした。

ひいおじいちゃんが、ゆっくりとつづけました。

「……じゃけん、わしも、時間ばかりで、ていねいに、ていねいに、彫るとさ。大先輩のさんごに、失礼にならんごと……」

さんごを彫りつづけて七十年。ひいおじいちゃんは、「名人」とよばれています。け

れどさんごは、百年でも、二百年でも、一人前じゃないといひます。

さんごは、さんご虫という小さな虫の骨でできたものです。その砂つぶのように小さな虫が、たくさん、たくさん集まって、毎年すこしずつ重なりあい、それを何百年もくりかえして、さんごが育ってゆくそうです。和真には、とても想像できない世界でした。

「さあ、和。そろそろ、晩ごはんは食べにいこうか。父ちゃんも帰っちゃろうしな」

和真は、小さくうなずきました。

ひいおじいちゃんが、にとわらいました。

「和のいうたごと、わしは、七十年も飽きんでつづけちよう、バカもんじゃ。それでもわしは、バカはバカでも、一流のバカになりたかち思っちよう。じゃばって、さんごにくらべれば、まだまだ二流じゃのう」

和真もひさしぶりに、くすつとわらいました。

「ひいじいちゃん。ちよつと、これ、もつてて」

和真は竜を、ひいおじいちゃんにさしました。

「どこいくと？」

「うらの空き地に、グローブば、おいてきちよつた。とつてくるけん」

和真が外にでようとすると、うしろから、ひいおじいちゃんがたずねました。

「和。こんど、試合のあつと、でられんかもしれんち？」

「だいじようぶ。でられる。おれもバカじゃけん……まだ、三流けど」

和真はそうこたえて、空き地に走っていききました。